

第2章 幼児教育等に学ぶこと

1 遊びの中で自主性と思いやりを育む

(1) 「遊び」を大切にされた保育

①よく遊び、よく遊べ

ある幼稚園のプレイルームの正面にこのひらがなの大きな文字がおどっている。

「よくあそび、よくあそべ」である。

かなり時代物の額縁だ。このことばには、この幼稚園の歴代の園長の幼児教育への熱い思いが込められている。遊びと生活が学びそのものの幼児教育であるが、これを正面に飾った人の勇気が伝わってくる。

そもそも、遊びが子どもたちの生活の中心であることは誰もが認めるところであるが、それが教育（学び）とは結び付きにくい時代があって、その考え方が今も引きずられている。そのことが子どもたちの発達を阻害し、小学校教育へスムーズにつなぐことができない結果を生み出してはいないだろうか。

子どもは「遊び」ながら、知識・技能をはじめとして自主性や思いやりなどを自発的に学んでいると言える。遊びの世界での学びは「子どもにとって価値ある知識・技能や活動」であるが、大人もそのことを価値あるものとして認めていくことが大切であり、「遊び」を幼児教育等のみならず、小学校教育へ、「遊びを通した自発的な学び」としてつないでいくことが大切である。

②「遊び」に見える幼児期の学び

幼児は友達と遊びの中で、いろいろなことを学び日々成長している。次の事例は、ある幼稚園の自由遊びの時間の光景である。

年中クラスの10人ほどの園児が、砂遊びをしていた。砂山を作ったり、川を作ったり、どろだんごを作ったり…。そんな中、アキラが、生きたカエルを中に入れてどろだんごを作り始めた。得意気に友達に見せている。

「ほら、このだんごの中にカエルが入っているんだよ！」

アキラの周りに子どもたちが集まり、複雑な表情でその手元を見ている。その様子をいぶかしげに見ていたサトミが、アキラに向かって強い口調で責め立てた。

「カエルさんがかわいそうでし

ょう？やめなさい！」

「いやだ。だって、楽しいもん。」

「カエルさんにもいのちがあるんだよ。

ひどいよ。」

アキラはどろだんごを丸め続ける。

アキラを男児たちが取り囲み、遊んでいる。いくらサトミが訴えても、アキラたちは全く聞く耳をもたなかった。むしろむきになり、今度は、雨樋を滑り台にし、カエルの入っただんごを流



して遊んでいる。カエルがだんごからはみ出ると、また、大きなだんごにして雨樋を滑らせ遊んでいた。
最初は勢いよく責め続けたサトミも、責めるのが自分一人であることに気づき始め、それまでの勢いがなくなり、何も言わなくなる。アキラはサトミの訴えを気にしつつも、自分の行動を正当化するような言葉を発しながら、どろだんごを丸め続けた。アキラと取り巻きの子どもたち、そしてサトミの間に微妙な空気が流れる。あんなに元気に話をしながら遊んでいたサトミが、その後は誰とも口をきかず、黙って遊んでいるのだ。心ここにあらずといった感じが伝わってくる。

しばらくして、サトミは意を決したように、しかしながら弱々しい声で、こうつぶやいた。

「逃がしてあげて。カエルさん、死んじゃうよ。」

すると、このやりとりを黙って聞いていたダイスケが、こう言った。

「ぼくの家でもミミちゃん、死んじゃったんだ。その時、すごく悲しかったよ。」

自分のペットの死に直面し味わった悲しみと、目の前のカエルのいのちを結び付け、サトミの意見に同調せずにはいられない様子であった。ダイスケの意見を受け、サトミは再び意見する。

「逃がしてあげようよ。かわいそうでしょう？」

口調には先ほどの勢いはなく、アキラを、周りを、諭すかのようなのである。するとミツルが、

「ぼく、前にカマキリいじめたけど。大丈夫だったよ。」

「大丈夫じゃないよ。カエルさんにだってお母さんやお父さんがいるんだよ。カエルさんだけじゃなく、お母さんもお父さんも悲しくなるよ。」

「そうだよ。ぼくも逃がしてあげた方がいいと思う。」「そうだよ。」「そうだよ。」

今まで口を閉ざし、状況を静観していた周りの子どもたちも、口々につぶやき始めた。

この目の離せない議論は、延々30分以上も続いた。担任を呼びに行こうかどうかでも議論が始まった。この場の雰囲気には耐えられなくなったのだろう。遂に、誰かが担任を呼んできた。途中、状況を説明してきたようである。担任は、静かな口調で子どもたちに問いかける。

「カエルさんは、そのどろだんごの中にいるんだね。どうしようか？」

子どもたちがこれまでの状況を口々に担任に伝える。すると、これまで口を閉ざしていたカオリが突然、アキラからカエルのだんごを奪い取り、ものすごい勢いで園内の隅にある小川に走っていった。そして、カエルを小川に放した。しかし、カエルは動かない。カオリの後を追いかけていったサトミは、「ああ…、死んじゃった…。」とうずくまった。

アキラもカエルの様子が気になっている様子で、一緒に小川のところまでやってきた。しかし、カエルは動かない。その姿をじっと見つめる子どもたち…。

すると、しばらくしてカエルがゆっくりと動き始めた。そして、泳ぎ始めた。子どもたちは初め驚いていたが、次第に笑顔になった。誰からともなく拍手がわき起こる。ふと気がつくと、アキラも一緒に拍手していた。元気に泳ぎ始めたカエルの姿を見届けた子どもたちは、はずんだ足取りで園舎の方へ向かう。もう片付けの時間なのだ。園舎に向かう途中、担任がサトミにそっとささやいた。

「きっと今頃あのカエルさん、お父さんやお母さんと会って喜んでるね。よかったね。」

サトミはとても満足そうにうなずいていた。



.....

さて、この「砂遊び」の中でのアキラを中心にした幼児の学びについて考えてみたい。

まず、ここには、幼児が夢中になって遊ぶことができる環境がある。そして、アキラはその環境に生きたカエルをもち込み、楽しく遊んでいる。山やトンネル、川作りだけでは満足しないアキラの、環境に主体的に働きかける行動が見られる。

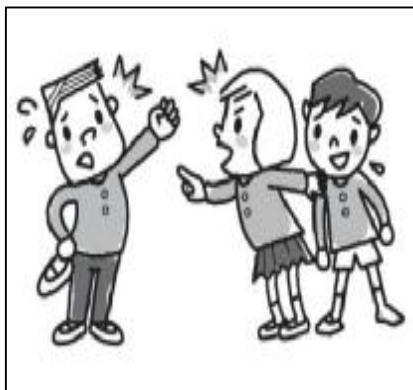
また、ここには共に学び合える仲間がいる。学び合える仲間とは、互いに考え合い、表現し合いながら、見方・考え方を変えていける仲間である。

アキラがカエルに興味・関心をもち、主体的に楽しく遊んでいることは評価されるべきことである。しかし、「いのち」という見方をした場合、自己コントロールしなければならないことがある。アキラもサトミや友達の意見に心は動いていたはずである。しかし、それが素直に表現できない気持ちも理解できる。カオリの突然の行動がこの事件に終止符を打ったわけであるが、これもまた予想外のことであった。しかし、言動に出るかどうかは別として、全ての子どもに、自ら考えて行動する「自主性」や「思いやり」の芽はあり、このような学び合いの中で、その子なりにその芽が大きく膨らんでいく様子が見えてきた。子どもたちは、日々の「遊び」の中でかかわり合いながら、このように多くのことを学び成長していくのである。

③遊びがもたらす価値

遊びのもつ意味と、遊びにより育まれる力について、丸野俊一氏は、その著書の中で、遊びの中で育まれるものを次のように整理している。こうした遊びのもたらす多様な価値についても、実践の中で意識していきたい。(丸野俊一「遊び体験がはぐくむもの」『児童心理 95 年 9 月号』)

- ア 具体的なモノを動かしたり、操ったり、道具を発見、創造、製作する体験世界
- イ 動き、音、におい、光の世界で戯れる中で、五感を通して感性や感動を育む体験世界
- ウ 現実と想像の世界を出たり入ったりしながら想像力を育む体験世界
- エ 問題に直面しそれに挑戦する中での失敗や成功を通して、意欲や創造力や問題解決能力といった認知面のみでなく、気力、忍耐力といった精神面をも育む体験世界
- オ いじめるーいじめられる、助けるー助けられる、嬉しいー悔しい、喜びー悲しみといった感情を通して、思いやりの精神を育む体験世界
- カ 他者との約束やルールを破ったり守ったりした時に生じる事象を通して、自主性や社会性を育む体験世界



(2) 自主性を育む

①地域の自然・くらしとのかかわりの中で自主的に活動する幼児

周囲が広々とした田んぼ、その遠く向こうに連なる山々が抱きかかえているような場所にある保育所、澄み切った空に子どもたちの遊び声がひびく。中央に小さな山のある原っぱのようなグラウンド（意図的にクローバーや雑草を植えたとのこと）で50数名の子どもたちが思い思いの遊びに夢中になっている。来週から始まる収穫祭に向けての活動をしているのだ。ある子どもたちはお店を開くために野菜や果物を、ある子どもたちは社の奥におさめる神様の製作、そして掛け声をかけて歩き回るための御輿の製作など、山形県内の幼児教育機関等ではどこにでも見られる光景である。



しかし、この保育所には他の幼児教育機関等とは大きく異なる保育者たちのこだわりがある。まず第一に、企画提案を小さい子どもたちにしたのは保育者ではなく、年長児なのである。保育者たちは、米の収穫ができたのは、田んぼの



守り神様のおかげであり、村人のおかげであることを話し、「ありがとう」を込めたお祭りであることを伝えただけである。では、何をするのか。年長児は時間をかけて話し合いをし、年中児以下の子どもたちに提案する。年中児以下の子どもたちは、やりたいことを更に年長児に要望する。

「綿あめ屋さんをやりたいです。」

「田んぼの神様の鳥居があるといいです。」

自由な雰囲気であるが、小さい子どもたちもしっかり話し合いを聞いている。楽しかった生活の中で経験したお祭りをイメージしている笑顔だ。自分で考え、自分で決める。

「神様作り、鳥居作り、お店屋さん、御輿作りの中から一つ選んでやりたいところに集まってください。」

実に見事な自主的活動だ。保育者はなるべく口出しをしない。じっと見守っている。自己決定ができず、困っている子どものそばに膝立ちになって寄り添い、その子が何をやりたいのかを丁寧に聞き出している。田んぼの神様をつくるグループは、「もう一度しっかり見てくる」とスケッチノートを持ってくる。保育者が最後尾につき、田んぼのあぜ道を一列になって出掛けていった。この収穫祭に関する遊びは、それぞれのグループでバケツに稲を植える前に、近所の農家の人々が保育所にやってきて、種もみをまくことから始まっている。

この保育所では、地域のくらしや仕事、自然に、子どもが主体的にかかわっていく遊びを大切にしている。また、このような活動を通して地域の人たちと幼児のコミュニケーションを豊かにしている。幼児が地域のくらしや仕事、自然に興味・関心をもつことは、地域の人たちにとっても大変うれしいことであり、地域の人たちも幼児に、そして保育所に対して関心をもち、積極的に協力してくれる。このような関係性の中で幼児の自主的な遊びが生まれてくるのである。

また、ここでは幼児の思いから生まれる自然な遊びを大切にしている。

本来、子どもの物事を為す衝動は、いろんな遊びから始まる。その遊びを通して友や保育者や家族や地域の人たちとかかわり、その中で、遊びがいろんな方向に発展していく。その一つに製作（～つくる）活動がある。そして、子どもは何かを製作するとそれを生かしたくなり、多くの人に伝えたい。そこに子どもたちの表現活動への欲求が生まれる。

この保育所の幼児は、先に述べた「収穫祭の遊び」の後に、米作りのいのちの源である「水」をテーマにした表現活動に向かうことになる。

②幼児の自主性を育む環境

子どもは、そこに「砂場」があれば山をつくり、トンネルをつくり、小川をつくり、水を流して遊ぶ。するとそこに船を浮かべたくなり、船をつくって浮かべる。水に浮かんでいる船を見れば動かしたくなる。ペットボトルに水を汲んできて流したり、扇で風を起こして進めたりする。また、一人の幼児の工夫した遊びは仲間を呼び込む、仲間が集まると、「一緒にしたくなるもの」が見つかる。

また、砂場があって、大人が見事な山をつくり、川をつくったとしても、そこでは遊ばず、すぐ壊してしまい、子どもたちは、自分たちで自分たちの砂山や川をつくる。子どもは、失敗しても、試行錯誤しながら創り上げていく「プロセス」が楽しいのである。

このように、幼児は、目の前の具体的なモノに主体的にはたらきかけ、仲間と一緒に動かしたり、操ったり、製作したりしながら、創造的な遊びの世界を楽しむのである。

右の写真は、幼稚園の中で子どもにあまり活用されていない樺の木々の環境を見直すことで、幼児が主体的にはたらきかけ、アスレチック遊びができる環境にまで創り上げていったものである。

以下は、そのプロセスを示したものである。



4月30日（木）

豊かな自然環境に気付き、遊びを生み出すきっかけとなる環境づくりの第一歩として、保育者は、樺の木とボビン（電線を巻いておく木製の筒）の間に、幅20cm、長さ2mの角材を橋として架けることにした。

他にも子どもたちと一緒にボビンや丸太、タイヤを組み合わせてアスレチックコースを作った。

子どもたちは橋を渡る楽しさや高さのあるスリル感を味わいながら、何度も繰り返し挑戦し夢中になって楽しんだ。



5月12日（火）

樺に架けられた木の橋の前後に丸太やタイヤをつなげ、アスレチックコースは迷路のようにつながっていく。角材の組み合わせに試行錯誤しながら、友達と力を合わせてアスレチックづくりに励んだ。

保育者は、タイヤの上に角材を乗せたり、大きなボビンを転がしたりする時、危険がないように援助もしながら見守った。



5月18日（火）

週末、おやじ会（PTA活動）の協力により、樺の木に2枚の板が架けられ、「橋」ができあがっていった。朝の準備を終えた子どもたちは、早速、木の橋の所に向かい、目を輝かせて渡りはじめる。

しばらくすると、ナオタロウが木の橋に座り、滑り台のように滑りはじめた。

他の男児も木の橋に腰掛けるようにして滑りはじめた。



5月19日（火）

年長担当の保育者が、木の橋を架けた樫の隣にある樫から桜に一本のロープをかけた。そのロープを見つけたゲンキは、ロープにぶら下がったり綱渡りのように逆さまになったりしていた。また、5、6人の子どもたちが一斉にぶら下がるとロープはブランコのように揺れる。「きゃあ！」と声をあげながら落ちないように必死にぶら下がっていた。



6月18日（木）

アスレチックコースは子どもたちのイメージやアイデアにより、日々その様子を変える。木の板は、時にはボビンから地面に渡された滑り台になり、また、木の根の上に置いたシーソーになる。2つのボビンに幅の狭い角材を2本渡した橋も現れた。



10月14日（水）

樫から桜に架けられていた1本のロープでの遊びに広がりをもたせたいと思い、ロープを1本から2本にした。それにより、桜から樫にロープを渡っていくことができるようになった。

また、それまでなかなかロープを使うことが難しかった年少のこどもたちも、ロープを2本にすることでその楽しさを味わうことができるようになった。



11月24日（火）

ロープを渡る子どもたちの動きを見ていると、その高低差から、桜から樫に向かって進んでいく。だが、樫の木にたどり着いても高さがあり、樫にタッチしてそこから飛び降りるか、飛び降りることができない子は戻ってくるしかなかった。

そこで、樫の幹にタイヤをくりつけ降りることができるようにした。そのことで、桜からロープを渡って樫に移り、タイヤを使って降りるというコースができあがった。



事例からわかるように、園の中の自然環境を見直すことで、これまであまり活用されなかった場所が、「アスレチック」という楽しい遊びの場に変わった。木の橋を渡る、木の板や丸太などを組み合わせて迷路をつくるなどの遊びは、子どもの創造力を引き出している。繰り返し、試行錯誤する中で、迷路づくりやシーソー遊びなど次々に活動が創り出されている。

大人が完成したアスレチックをつくったのでは、子どもはそこで数回「楽しんだ」ということで、遊びを通した子どもの成長を見ることは少ない。この園の取り組みのよさは、最初から完成形のアスレチックにするのではなく、少しずつ手を加えたり、子どもたちのイメージに合わせて自由に組み合わせたりしていることである。子どもの自主性を「環境づくり」を通して育てていると言える。

(3) 思いやりの心を育む

① 思いやりを受ける体験が思いやりの芽を育む

子どもの中に思いやりの心を育てるためには、子どもを取り巻く環境が大切である。最も身近にいる家族、そして保育者が思いやりのある人間であることが最高の環境なのだ。そして他の人から思いやりを受けたという経験があればあるほど、社会のルールをそれほど厳しく教えなくとも、子どもは自然に守ることができるようになるものである。

これは、ある保育所での思いやりの芽が育まれたひとこまである。

お誕生日に、その子が一番してほしいと願っていることをプレゼントすることになった。プレゼントは、子どもたちの話し合いにより決まる。泣き虫のケンちゃんには、戦いごっこで勝たせてあげてプレゼントすることにした。今まで勝ったことは一度もなく、負けてばかりでかわいそうだと子どもたちは思っていた。

いつもどおりケンちゃんも入り、新聞紙で作った剣でのチャンバラ遊びが始まった。やっぱりケンちゃんは負けて泣きべそをかき始めた。その時だ。リーダー格の子が「プレゼント、プレゼント。」と、少し大きな声でみんなに伝えたのである。子どもたちは伝わった順にあわてて、ばたばたと倒れて死んだまねをし始めた。最後にはケンちゃんをのぞいて全員が倒れてしまった。ケンちゃんは、しばらくぼかんとしていたが、その後にくっとうと笑った。友達は起き上がりながら、「誕生日、おめでとう。」と歌った。世界にたった一つしかないあったかいあったかいプレゼント。

この遊びの中で子どもたちは、たくさんのことを無意識のうちに身に付けている。

他の人を思いやること、みんなで決めたルールを友達が幸せになるために守ること、勝ちたい自分を制御すること、そしてやさしい友達に感謝する心だ。



しかし、保育者が、ありきたりなプレゼントではなく、子どもたちが心から喜び、幸せな気持ちになれるようなプレゼントを発想し、子どもたちに働きかけなければ、この遊びは生まれてこなかった。そして、いつも負けて泣いてばかりいたケンちゃんへの思いやりの心が、子どもたちの中に育っていたからこそ生まれたものだった。保育者自身が、「また、めめめして…」と受け止めたのでは、子どもたちの中のやさしさも育たない。

子どもにとって保育者は憧れの的である。保育者が思いやりのある言葉がけを常に行っていれば、子どもたちの心の中にも自然に思いやりの心は育まれてくるのである。

②喧嘩しても仲直りできる子どもに

自己中心的で、自分の思いを上手に言葉で表現できない子どもは、日常的にトラブルを起こしがちだが、大切なことは、「喧嘩しても仲直りができるか」ということである。子ども相互の間でトラブルを解決していく体験の積み重ねが、思いやりの芽を育むのである。次に紹介するのは、相手の思いを察した温かな一言でトラブルが解決した事例である。

数人の子どもが机を縦につなげて「トンネルごっこ」をしていた。そこに、二人の子どもがきて、机をずらしたり、通せんぼをしたりしていじわるを始めた。当然、喧嘩になった。

「サトちゃん、何するの？」と怒る友達に、サトちゃんは何も言わず黙っている。仕方なく机をもとに戻して、また「トンネルごっこ」を始める。しかし、サトちゃんだけが、また机をずらしていじわるをする。

「サトちゃんやめて！」という声が大きくなる。そんな様子を保育者は近くで見守っている。しばらくして、アカネが、「サトちゃんもいっしょに遊びたいんじゃない？」と言うが、サトちゃんは黙ったままである。行動を起こしたアカネを支援しなければと、ここは保育者の出番である。「ねえ、サトちゃん、一緒に遊んだらいいんじゃない？」それでも、サトちゃんは黙ったままである。保育者は、一緒にいじわるをしたワタルにも「一緒に遊んだら？」と語りかける。ワタルは、「ぼく、一緒に遊びたい！」と思いを告げる。それでも黙っているサトちゃんに、ワタルは、「サトちゃん、一緒に遊ぼう！」と今度は誘いの言葉をかける。そばにいた数人も誘いの言葉をかける。すると、サトちゃんはうつむきながら「うん。」とうなずいた。

この保育所には、喧嘩になるとすぐに保育者に助けを求めたり、保育者に告げ口をしたりする子どもはいない。また、いじわるする子どもを一方向的に叱る保育者ももちろんいない。子ども同士のトラブル発生は自然なことであり、思いやりなど社会性が育つ「学び」の場であるにとらえ、子ども同士での解決の場面を尊重している。保育者は、「全ての子どもには思いやりの種があり、もう芽を出している。そして、その芽を育てていくのが保育者の仕事である。」と考えているのである。

今、小中学校の子どもは、少子化、集団遊びの消失等の影響もあり、人間関係でのトラブルを解決してきた経験が少なく、「トラブルを解決していく力」が低い。また、トラブルを起こさないように、または起こっても、そこから逃避する子どもも多くいる。幼児期から小学校低学年の時に友達とたくさん遊び、遊びを通して、人間関係のトラブルを解決していく力と、良好な人間関係の築き方を覚えていくことが大切である。



2 子どもの成長を促す保育者の見取り～4つの目をもつ保育のプロであれ～

これまで述べてきたように、子どもは環境に働きかけながら、友達との遊びを通して自主性や思いやりの心を育てている。しかし、子どものそのような成長を促すのは環境を工夫し、子どもの遊びを見取りながら適切な支援をしている保育者なのである。

情報過多の時代、子どもたちは洪水のように迫ってくる情報の波に飲み込まれがちである。そして、保育者も同じ危険にさらされる。子どもと保育者の直接的な触れ合いに人間教育の成果がかかっているのである。保育者は、子どもを見取り、子どもの成長を促すプロフェッショナル（知的職業人）としての力をもつべきである。特別な力とは、4つの目をもつことである。ピアノが弾ける、手遊びを多く知っている等の指導技術や知識以前に、子どもの成長を促す「目＝心」をどれだけ研ぎ澄ましているかが肝心なことである。その4つの目とは次のような目である。

- 子どもには無限の可能性と一人一人ちがうよさ（個性）がある。だから、子どもの内面を見つめる「透視の目」をもたなければならない。
- 子どもは大人という言葉で輝きもすれば、落ち込むこともある。だから、子どもが輝く対応のできる「感性の目」をもたなければならない。
- 子どもはみんなそれぞれの生活を背負いながら生きている。だから、多角的、継続的に見続け、子どもの変化を的確に見取る「プロセスの目」をもたなければならない。
- 子どもには大人とは違う見方・考え方・行い方がある。だから、いつも「これでいいのか？」と振り返る「内省の目」をもたなければならない。

しかし、4つの目はばらばらに存在するのではなく、絡み合って複合的に機能するものである。

<4つの目をもつ保育者>



- 1 「透視の目」
子どもの内面を見つめる
- 2 「感性の目」
子どものよさを引き出す
- 3 「プロセスの目」
子どもを多角的・継続的に見続ける
- 4 「内省の目」
「これでいいのか？」と振り返る

次の事例は、4つの目をもった保育者の子どもの見取りと支援である。

その日は7月の暑い日だった。子どもの主体的な遊びを尊重しているその園では、未満児（3歳未満の子ども）から年長児たちまでが入り混じって、思い思いの遊びに熱中していた。

ケンちゃんとリュウちゃんは未満児だが、年中児に交じって遊ぶのが大好きだ。今日も玄関先で水遊びをしている年中児と大きなポリのたらいに水を入れ、舟を浮かべて遊んでいた。そのうちに、二人は

水がいっぱい出ている一本のホースに関心を寄せた。ケンちゃんはそのホースの先を天に向けて、噴水のように水をまき始めた。リュウちゃんも噴水が気に入ったらしく、いきなりケンちゃんからそのホースを取ろうとした。でもケンちゃんは手を離さない。二人に固く握られたホースからは水がじゃあじゃあ出っ放しになり、二人の子どもたちの頭から降り注ぐ。ずぶ濡れになった二人は大声でわあわあ泣き出したが、ホースを握る手は離さない。お互いに満身の力をこめて引っ張り合う。周囲で遊んでいた年中児の子どもたちは遊びをやめて呆然としている。

しかし、その様子を担任は、じっと見つめている。いつ二人をひき離すべきなのか、担任は時を待っているようであった。そのうち、ケンちゃんはおしっこをもらしてしまった。それでも二人は手を離さない。遂に、担任は二人の間に入り、ケンちゃんにホースを渡し、リュウちゃんを抱き上げ「もうひとつホースがないか、探しに行こう。」と言って、その場から去って行った。

やっと自分で自由に使えるようになったケンちゃんは、涙でいっぱいの顔に笑みを浮かべ、ホースで水まきを続けていた。5分もたたないうちに「お昼のご飯です。」の合図が入り、担任の保育者が迎えにきた。

「ケンちゃん、おしまいね。」

「もっと、もっと……。」

「また、明日ね。」

だだをこねても担任は譲らない。約束なのだ。やさしさの中の厳しさだ。着替えを済ませたケンちゃんが、みんなと楽しそうに給食を食べていた。別人のように大きく見えた。

担任の保育者は、なぜ、あれだけ長い間、二人の子どもたちにホースの奪い合いをさせていたのだろうか。担任は次のように語った。

「そうですね…、少し長かったかもしれませんが…。あの子たちの手、足の筋肉は、ぱんぱんでした。限界でした…。でもね、ケンちゃんがあんなに強く自己主張したのは、今回が初めてなんです。いつもは、何でも他の子どもたちから取られっ放しなんです。悲しそうにして…あきらめる子だったんです。だから、今日は頑張らせてみたかったんです。」

美しい笑顔だった。

この保育者は、しっかりとした**プロセスの目**でケンちゃんを見取っていた。そして、**透視の目**で、悲しいケンちゃんの心を汲み取っていた。今日この時がチャンスだと判断し(**感性の目**)、自分自身の対応を振り返っていた。(内省の目)

保育のプロとしての4つの目が輝いている姿である。

